様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２３３５

研究課題名（和文）ディケンズ文学における眠りの多様性

研究課題名（英文）Sleep and its variations in the works of Charles Dickens

研究代表者
渡部　智也（Watanabe, Tomoya）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０６１２８４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、チャールズ・ディケンズの作品に描かれる眠り（あるいは夢）の描写を分析し、各作品におけるそれらの描写の多様な役割を明らかにした。具体的には、中期『マーティン・チャズルウィット』において、殺人者のジョーナスと被害者のティッグとの関連を示唆するものとして両者の夢が、中後期の『荒涼館』において、バケット警部の人間性とその限界を示唆するものとして眠りの描写が、そして後期の『大いなる遺産』において、主人公ピップの成長と、見果てぬ夢からの解放を示すものとして、眠っているときに見る夢の描写が、それぞれ巧みに用いられていることを明らかにし、研究発表や雑誌論文、図書といった形でその成果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
チャールズ・ディケンズは、人間の眠りや夢に強い関心を持ち、それらを作中で活用していたと考えられる。一方で、睡眠障害の描写で知られる『ピクウィック・ペーパーズ』も含め、これまでのディケンズと眠りに関する研究はディケンズの前期作品に集中していた。本研究課題の遂行によって、ディケンズが中期以降の作品においても眠りや夢をさまざまな形で用いていることが明らかとなり、ディケンズの眠りへの関心が一時的なものではなく、作家人生全体に関わるものであり、より深い理解に繋げるためには更なる研究が必要なテーマであることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the depictions of sleep (or dreams) in Charles Dickens' works, and clarified the various roles they play. For instance, in Martin Chuzzlewit, the dreams of the murderer Jonas and the victim Tigg are used to suggest the close (but secret) link between them; in Bleak House, the descriptions of sleep are used to suggest the humanity of Inspector Bucket as well as his limitations; and in the Great Expectations, I found that the descriptions of dreams while asleep are skillfully used to demonstrate the growth of Pip. I presented the results of my research in the form of an oral presentation, journal article, and book.

研究分野：英文学

キーワード：ディケンズ　眠り　夢　不眠

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

チャールズ・ディケンズは眠りや夢に強い関心を持ち、作中に印象的な眠りの描写を多く用いた作家として知られている。中でも最も有名なのは、初期作品『ピクウィック・ペーパーズ』（*The Pickwick Papers*）に登場する、太った少年ジョーの描写である。昼間に眠り込んでばかりのこの少年について、作品が世に出されたおよそ１世紀後に、これがピクウィック症候群と命名されるところの睡眠障害の克明な描写である、との指摘が医学研究者のＣ・シドニー・バーウェルらによってなされた（Burwell, 811-818）。この事実は、ディケンズが非常に丹念に市井の人々の眠りを観察し、それを作中に用いていたことをよく示していると言える。このようなディケンズと眠りに関する医学的観点からの研究が存在する一方で、ディケンズと眠りを文学的観点から研究しようとする試みは質と量の両面で不足していた。本研究課題遂行者はその状況を改善するべく、これまで一貫してディケンズ作品における眠りの描写を研究し、『オリヴァー・ツイスト』（*Oliver Twist*）や『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*）など、主としてディケンズの初期作品の分析を通して、ディケンズ文学において眠りが構成上欠かせぬ役割を果たしていることを明らかにした。そしてその成果を博士論文としてまとめて平成 25 年 12 月に京都大学に提出した（審査を経て、平成 26 年 11 月 25 日に学位授与）。しかしその博士論文の審査の過程で一人の審査委員より、私がそれまでに研究対象として扱った前期作品以外でも眠りが多様な働きをしている可能性が示唆された。それまでは眠りや夢に関する表現（sleep や dream 等の単語）の使用頻度の高い作品を中心に分析をおこなっていたのだが、必然的に研究対象が前期作品に偏り、中後期以降の作品の研究が不足しがちだったのである。しかし、例えば後期の名作『大いなる遺産』は、眠りや夢に関する単語の使用数こそ多くないものの、その描かれ方には一定のパターンといって良いものがあり、またその大半は主人公ピップに関わるものだということがわかった。従って、研究する作品の範囲を広げ、特に表面上は眠りの描写が多く見られないと感じられる作品を対象に分析を進めることで、ディケンズと眠りの関係をさらに追求することを目的とした。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、ディケンズ文学における眠りや夢の描写の多様な役割を明らかにすることである。また、上記「研究開始当初の背景」でも述べたように、これまでのディケンズと眠りに関する研究は、研究代表者自身の研究も含めて、眠りの描写が多く見られる前期作品に関するものが中心となっていた。一方で、ディケンズ文学と眠りの関係を考える上で、その研究対象を特定の時期の作品に限定することは、その多様性を見落とす危険性がある。過去の研究結果やそれに伴う先入観に囚われることなく、研究対象とする作品の範囲を広げることが、ディケンズ文学における眠りの多様な役割と意味を明らかにする上で必要なことであろう。そのため、本研究においては特に眠りや夢への言及がそれほど目立たない作品における眠りの役割に注意を払って探究することを目的とした。

３．研究の方法

本研究においては、主として以下の３つの手法を用いて研究をおこなった。

(1) 一次資料の精読

ディケンズはその多くの作品が非常に大部で、なおかつその英語が難解という特徴がある。そのため、腰を据えて精読しなければ、作中に潜む重要な意味を見落としてしまうことにつながりかねない。特に夢の描写は荒唐無稽なものになりがちだが、それだけに難易度が高い。そして同時にそこに意外な意味合いが隠されていることも少なくない。従って、本研究においては何よりもまず、眠りや夢に言及する場面に特に注意を払いつつ、ディケンズの作品を正確に読み解くことを重視し、作品の精読を研究の基盤とした。また、ディケンズは作品以外にも多くの「手紙」を残しており、分析対象とする作品に関連する手紙を読み解くことにも力を注いだ。「研究成果」のところで後述するが、この手紙の研究が、特に『マーティン・チャズルウィット』（*Martin Chuzzlewit*）における夢の描写の研究において大きく役立った。

(2) 関連研究資料の収集と読解

ディケンズは英文学史上の巨人と言っても良い存在であるため、毎年のように新しい研究論文と研究図書が出版されている。従って、内容を把握しておくべき論文の種類と数は多岐にわたる。したがって、ディケンズに関する論文はほぼ全て収集し、その内容を把握することを試みた。その際、例えばディケンズと眠り、というようなキーワードで論文を探してもほとんど見つからない上、必ずしも表題やキーワードに眠りや夢が上がっていない論文において、作品の眠りや夢への言及がおこなわれることも少なくないため、幅広くディケンズに関する論文を収集し、読み

解いた。また、眠りや夢に関する最新の医学研究書も読み進め、ディケンズが描いていた眠りや夢の描写が、現代の睡眠医学における眠りや夢に対する認識と合致するものであるか否かについても検討した。「研究成果」のところで後述するが、現代の眠りや夢に関する研究との比較研究については、特に『大いなる遺産』（*Great Expectations*）における夢を分析する際に重要な役割を果たした。

（3）同時代作家との比較、対比

ディケンズは眠りや夢に強い関心を寄せていたが、当時、一世を風靡したセンセーション小説作家などを除き、眠りや夢に興味を持ち、積極的に作品に用いた作家というのは非常に少なかった。そのため、ディケンズの眠りの描写を他の作家のそれと比較することで、彼の特殊性をより浮き彫りにすることができる。下記の「研究成果」のところで触れるように、後期の『荒涼館』（*Bleak House*)のバケット警部の描写と、同時代のアメリカ作家エドガー・アラン・ポーの生み出した探偵デュパンの描写を対比させることで、ディケンズの眠りの描写の特殊性が明らかになった。

４．研究成果

本研究の研究成果について、年度ごとに記していく。

（1）平成 30 年度（2018 年度）

研究計画初年度に当たる平成 30 年度は、本研究課題遂行の土台を構築する年度と位置づけ、本研究の遂行に必要な資料の収集と読解を中心におこなった。そのため、この年度においては研究発表や研究論文といった目に見える形での成果を上げることはできなかったが、一方で続く研究年度に関わる無形の成果を上げることができた。中でも特筆すべきは、同年度内に出版された Michael Greaney による *Sleep and the Novel*（Macmillan, 2018）を読んだことである。同書は研究代表者の知る限り、文学的観点から眠りというテーマに取り組んだ唯一の研究書であり、その点で小説作品における眠りの研究に新たな地平を開いたと言える研究である。研究代表者は同書の著者 Greaney と、必ずしも意見を同一にするわけではないが、特にディケンズ作品を扱う中で、「視線」の問題と絡めて論じている点には刺激を受けた。「研究開始当初の背景」でも述べたように、ディケンズは周囲の人々の眠りをつぶさに観察していたと考えられる。これが彼の眠りへの関心の高さを示す証と考えられているわけだが、一方で、眠りを観察するということは、眠っている人間の側に、目を覚まして、その眠る人物を見る別の人間が存在することを意味している。翻って、作中において登場人物が眠る姿が描かれる際に、その人物が単独で眠っているということはあまりなく、多くの場合は何者かがその様子を眺めているのだ。本書の読解を通して、ディケンズ作品においては眠っている人間を見る別の人間が存在している事が多い、という気づきを与えられたという点は、この研究年度における大きな成果と言える。

一次資料としては、『マーティン・チャズルウィット』と『荒涼館』の精読に励んだが、これは翌年度以降の研究発表および研究図書の形での成果公表につながった。

（2）令和元年度（2019 年度）

研究計画 2 年目にあたる令和元年度においては、初年度に開始した『荒涼館』の分析を継続した。同作に登場するバケット警部は、イギリス小説における最初の刑事探偵とも呼ばれる人物であるが、一方でお茶目なところもあり、人間的な描写が目立つ人物でもある。特に、最後に謎解きをおこない、殺人事件の犯人を暴く場面の直前で、ぐっすり眠ったという事実が強調して読者に伝えられる。一方で、ディケンズと同時代に活躍し、推理小説の始祖と言われるアメリカ人作家エドガー・アラン・ポーが生み出したオーギュスト・デュパンは、鋭い観察と緻密な論理に基づく冷徹な探偵として描かれているが、その一方で、彼は昼間はろうそくを立てて室内を暗くし、夜は友人とともに通りに繰り出すという生活をしている変人として描かれている。何より、デュパンの描写には意図的に眠りの描写を排除していると思われるところがあり、意図的に眠りの描写を強調していると思われるバケットの描写とは好対照を成している。これらの点を中心に両者の比較をおこない、ディケンズが眠りの描写をバケット警部に対して巧みに与えることで、彼の人間性だけでなく、「人間としての限界」をも強調しようとしていることを明らかにし、令和元年度のディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会のシンポジウムにおいて発表した。

また、『荒涼館』の分析と並行して、前年度からの『マーティン・チャズルウィット』の研究も継続した。『荒涼館』と同様、同作品にも探偵と呼べる登場人物（保険調査員のナジェット）と殺人事件が描かれており、この事件には登場人物の眠り（夢）が関連している。そのため、当初は比較として『荒涼館』の分析の中にこの点も加えて前述の研究発表をおこなうことを考えていた。しかし研究を進めるうちに、作品の性質も探偵の性質も大きく異なることに加え、眠りと夢の描写の意味と役割も異なることがわかったため、『マーティン・チャズルウィット』については翌年度に別の形で成果を発表することとした。

（3）令和 2 年度（2020 年度）

研究計画最終年度にあたる令和 2 年度においては、まず昨年まで精読を続けてきた『マーティ

ン・チャズルウィット』における夢に関する研究をまとめた。前述したように、同作品ではジョーナス・チャズルウィットによる父殺しと、そのことで彼を脅迫したモンタギュー・ティッグ殺しという 2 つの殺人が描かれる（ただし、最後に前者は真実ではないことが明らかとなる）。この中でディケンズは、殺人者ジョーナスと被害者ティッグの間につながりがある事を、事件の前後で 2 人がそれぞれに見る夢という形で示唆している。作品を執筆当時、ディケンズは自分の父に対して怒りを感じていた。借金を重ね、有名作家となった自分に金をせびる父の利己心に、彼は苛立つとともに、一方でそのような父と自分自身も似たところがあると密かに感じていた（この点については当時の手紙を丹念に検討することで明らかとなった）。そのため、自分と父の類似に模して、殺人者と被害者の類似を描いたのである。そして両者のつながりを示す道具として、夢という無意識の状態を用いたのである。これらの点をまとめ上げ、共著の研究書として成果を発表した。

あわせて、『大いなる遺産』の夢の分析をおこない、主人公のピップが作品の中で、「紳士になる夢」という、「目覚めている時に見る夢」（比喩的な意味の夢）と連動する形で現れる「夜の夢」（眠っているときに見る夢）に苦しめられていること、そして作品の最後ではその夢から完全に解放されていることを明らかにした。ディケンズはピップの夢を描く中で、最初は彼が昼間に経験した出来事と直接的なつながりを持つ夢を描き、最後の最後で、昼間の出来事とは関連のない、奇妙な無機物になる夢を描いている。そしてディケンズ自身が書いた夢に関する手紙の分析により、これらの描写のうち、前者はディケンズ自身、フィクションでしか見ることのない夢と考えていたが、後者についてはディケンズが「フィクションではなく、実際に人間が経験する夢」と考えていた夢あることがわかった。そのような夢から最後に醒めるという描き方をすることで、ピップが文字通り夢の世界から完全に切り離された事を示唆しようとしたのである。Michael Schredl 等の現代の医学研究が示しているように、ピップが最後に経験しているような、無機物になるという夢は現実にも起こりえると考えられており（Schredl, 182）、その点でこのディケンズの描写は先見性のあるものだということが確認できた。こうして得られた成果について、研究論文として公表した。

以上の研究により、これまで眠りという観点からほぼ研究されてこなかった作品においても、ディケンズが巧みに眠りや夢を用いているということ、そして、各作品で眠りや夢が担う役割が大きく異なることから、ディケンズ作品において眠りが持つ役割が極めて多彩である事が確認できた。

引用文献

Burwell, C. Sidney and others. “Extreme Obesity Associated with Alveolar Hypoventilation-Pickwickian Syndrome.” *American Journal of Medicine* 21(1956): pp.811-818.

Greeney, Michael. *Sleep and the Novel*. Macmillan, 2019.

Schredl, Michael. “Typical Dream Themes.” *Dreams: Understanding Psychology, and Culture*, vol. 1. Edited by Robert J. Hoss et al., Greenwood, 2019, pp.180-88.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 渡部智也	４．巻 52巻4号
２．論文標題 "That poor dream, as I once used to call it, has all gone by" :『大いなる遺産』における「夢」について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福岡大学人文論叢	６．最初と最後の頁 1181－1202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 渡部智也
２．発表標題 謎解きは書評のあとで
３．学会等名 令和元年度ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Tomoya Watanabe, Mitsuharu Matsuoka, Paul Schulicke, et al.	４．発行年 2020年
２．出版社 Athena Press	５．総ページ数 366
３．書名 Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ディケンズ・フェロウシップ日本支部令和元年度秋季総会ヴァーチャル・カンファレンス
http://www.dickens.jp/agm/2019/vod.html

Dickens and the Anatomy of Evil（研究図書紹介ページ）
http://victorian-studies.net/dickens-2020.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関